

沖縄現代史研究の同時代史

— 今日における対抗的歴史叙述の可能性 —

戸邊秀明 (東京経済大学)

I 課題設定

1. 主題

① 地上戦と軍事占領の体験を思想化する営為

* 「戦後沖縄の思想」の根幹にある二重の経験

→ 近年、研究が進み、個別の蓄積も (反復帰論、文学表現、阿波根昌鴻、etc.)

→ 鹿野政直『沖縄の戦後思想を考える』(岩波書店、2011.) がひとつの体系化

② では「思想化」以前の体験自体は？ 今日における思想化の課題

* 歴史叙述の意義 → そのような体験を歴史に定着させる作業を通じて思想化を図る今日の営為

→ 沖縄現代史研究における近年の歴史叙述を通じて、思想化の現在を考える

2. なぜ“迂回”するか

① なぜ歴史叙述を通じてなのか

a. なぜ当時の「思想」そのものの分析ではないのか？

→ 思想の剥製化を防ぐため (もちろん、これは実証と矛盾しない)

b. なぜ現在の思想動向の分析ではないのか？

→ 状況をなぞり強化してしまうことを防ぐため (方法的な相対化ぬきに「参加」はありえない)

② 沖縄におけるこの四半世紀の歴史意識の振幅の激しさ

* これを規定する現在の状況を繰り返した歴史分析を通じてでなければ、歴史叙述も現状分析も危うい

* 「沖縄の思想」に局限する語ではなく、周辺世界 (特に日本) の動向との関係から理解すべき

→ これらの問題を意識して取り組まれた沖縄現代史 (イクサ世・アメリカ世の叙述) から捉え直す

II 現代沖縄の歴史意識の振幅と日本社会 戸邊 2013・2015ab

1. 1995 年以後 = 「沖縄問題」が創り出された時代

① 1995 年 = “沖縄の現在” の起点 → 「少女暴行事件」を契機とする広汎な米軍基地反対闘争へ

② これを抑え込む「沖縄問題」という認識枠組への封じ込め (1990 年代後半～2000 年代前半)

A 政治：県内移設を普天間基地閉鎖の条件とする日米政府 (安保・基地問題の「沖縄問題」化)

B 経済：基地所在市町村に国が直接補助金を投下 (いっそうの補助金依存に陥る自治体)

→ 安全と雇用の“交換” 成立が印象づけられる (あとは基地問題が「沖縄の内紛」として理解される)

C 文化：観光・文化産業による沖縄ブームの持続

→ 日本社会で「沖縄大好き」が増えても、現実の沖縄理解の是正には結びつかない構造ができた

2. 「沖縄イニシアティブ」とその背景 — 沖縄における新自由主義的歴史意識

① その性格：沖縄サミット開催を前にした政府関係の政策会議に出された文書

* 沖縄側から米軍基地の存在を積極的に容認し、整理縮小を求めつつ、“正当な”交渉の権利を要求
→ 作成の中心が琉球大学の著名な歴史家であったため、沖縄言論界では概ね新同化主義との総批判

② その文書に現れた「歴史」と「主体」

* 「セルフ・リスペクト」のための歴史

→ 歴史から自由になりたい、そして歴史を自由に領有化したい、という欲求

* 告発者から調整者へ：「責任ある主体」として交渉能力を認められるための片道切符

* 極めてジェンダー的に秩序化された文書 → 日米権力＝男性同盟への参入を求める欲望にあふれる

③ 「9.11」後のあっけない破産、そしてその後の荒涼な風景としての「沖縄研究」の隆盛

⇒ それでもこれは、沖縄における新自由主義時代の歴史意識の露頭 → 「一部の議論」ではすまない

④ 背景：封じ込めの沖縄内部への内攻

* 沖縄社会自体が、観光用の沖縄表象を歴史意識として内面化

→ 「日本のなかの外国」「癒しの島」像によって消されていく戦争と占領の歴史

* 過剰に語られる歴史（琉球史）と（再び）湮滅させられる歴史（近現代史研究の停滞）

◆資料1 大城常夫・高良倉吉・真栄城守定編著『沖縄イニシアティブ：沖縄発・知的戦略』ひるぎ社、2000

A：私たちの願いは、沖縄が自らの過去・現在・未来に対して積極的な自己評価を与えることであり、日本社会の一員として自己の想像的役割を定義することであり、アジア太平洋地域の中でどのような役割を発揮できるか、その際の自己像を明確にすることである。

B：だが、私たち三人は、「歴史問題」を基盤とするこの「地域感情」を尊重しつつも、「歴史」に過度の説明責任を求めたがる論理とは一線を画している。[中略] 大事なことは、「歴史」に支配されたままであることではなく、現在に生きる者としてその責任と主体に立脚して、「歴史」および未来にどう向かい合うかである。[中略] 歴史を定義するのは現在の我々であり、それゆえにこそ現在の我々は「普遍的な言葉」を持つ自覚と責任を逆に歴史によって凝視されている、と考える。

C：現在におけるアメリカ軍基地の問題は、それが存在することの是非を問う問題としてあるのではなく、その効果的な運用と住民生活の安定をいかに矛盾なく調整できるかという課題としてあることになる。[中略] 我々は基地の告発者のではなく、安全保障に大きく貢献する地域として、その基地の運用のあり方を生活者の目線で厳しく点検する一方の当事者の役割を果たさなければならない。

◆資料2 新城郁夫 2010『沖縄を聞く』みすず書房、pp.48-49

『沖縄イニシアティブ』という沖縄の主体化をもくろむ政治的テキストは、その実、徹底したイニシアティブの放棄をこそ宣言している。[中略]『沖縄イニシアティブ』は、政治的主体性の放棄においてこそはじめて「同盟」から承認される従属的「自己」を、主体として誤認することによってはじめて成立する、沖縄の政治的主体化の失敗をこそ明らかにするテキストとなるほかないのである。

2. 反転の2つの起点

① 沖縄戦「集団自決」記述の改竄強制をめぐる教科書検定問題（2007＝第一次安倍内閣）

* 沖縄では、保革を越えた政府批判の萌芽となり、沖縄戦を軸とした歴史認識の一層の深化へ

② 普天間「最低でも県外（県外移設）」提起と迷走（2009＝鳩山内閣）

* 変更可能性の「発見」とその後の幻滅、自民全敗により知事も含めた「オール沖縄」が一度出現

* 2009＝琉球侵攻400年、琉球処分130年という節目の符合が進めた「沖縄差別」の実感

⇒ 「構造的差別」の可視化、「基地負担」＝「差別」という再定義、歴史的な「差別」系譜の再確認
(+「島ぐるみ」という概念の活性化 →政治家たちを縛る力を持ち始める)

* 「基地を挟んで県民が左右に分かれてのしり合って、それを上から見て笑っている人がいませんか」
（『朝日新聞』2014.11.17）という認識を沖縄の保守本流政治家が口にするまでに

3. 沖縄に対するレイシズムの発動

① 2006年沖縄戦「集団自決」教科書検定問題及び「集団自決」裁判（2005～2011）

* 第一次安倍内閣の歴史修正主義→「集団自決」に関する日本軍の強制という“不都合な真実”を隠蔽
→沖縄を始めとする大きな批判の声で、教科書記述はほぼ回復、裁判も被告（岩波・大江）の勝利に

* 「オール沖縄」の保革連携の契機が、沖縄の検定撤回運動のなかで生まれる

→民族性の問題ではなかったにもかかわらず、沖縄と日本の乖離が浮かびあがることに

② 第二次安倍内閣で加えられた何重もの“屈辱”

* 沖縄県内全市町村長・議会議長の「建白書」への拒絶と東京街頭での対沖縄ヘイトスピーチ（2013.1.28）
→「オール沖縄」の軽視と人種主義的な沖縄拒絶の公然化は、沖縄内に大きな衝撃を与える

* 「主権回復の日」制定と式典への沖縄代表（高良倉吉副知事）招致（2013.4.28）

→同日を「屈辱の日」とする沖縄の歴史意識をふみにじり、現存する沖縄の「植民地状況」を否認

* 沖縄県選出自民党議員の「移設容認」への転向と知事の辺野古売り渡し（2013.11~12）

→だが知事の日本への屈服と自発的隷従の姿が曝され、安倍政権の意図とは逆効果に（翁長県政へ）

③ 沖縄独立論への“警戒”

◆資料3 松浦篤「沖縄独立論の陰に中国あり」（『中央公論』129巻2号、2014）

沖縄は独立すべきだ——。こんな荒唐無稽に思える話が沖縄で大まじめに論じられ始めた。「独立論者」たちは、十七世紀に薩摩藩に征服されて失った「琉球人の誇り」を取り戻し、米軍基地負担も一挙に解決しようと訴える。だが、彼らの背後には尖閣諸島（沖縄県石垣市）の領有権を主張する中国の影がちらつく。日本政府が尖閣諸島で譲れば、次に失うのは沖縄かもしれない。

⇒ 教科書検定問題前後から強まった沖縄に対する不信の眼差しが人種主義的傾向を帯び、昂進

(ex. 高江基地建設反対運動に対して、動員された大阪府警機動隊員による「土人」「シナ人」発言
→さらに大阪府松井知事がこの2人を“激励”してさらに憎悪を煽る)

⇒これらが沖縄の屈辱感を興隆させ、琉球処分時の王府官僚の屈服と重ね合わせる言及が頻出していく

4. 対抗言説による沖縄の歴史意識の屈折

① 「自己決定権」論から独立論の急進化へ

* 「琉球民族独立総合研究学会」発足（2013.10）

a. 主権国家として沖縄が独立するための実際的な方策の検討

b. 言語復興運動等により自分たちの文化を取りもどそうとする活動

c. 移動研究会開催などシマとの交流を通じた普及活動（「沖縄（本）島」中心主義の克服）

*独立の賭金としての「主権」の急速な浮上

→日本の主権（日米共同支配）の下では自己決定と「自己」（文化的共同体）の回復は不可能と自覚
→呼び出される「主権国家」「民族国家」琉球王国という“歴史”

- ・かつて主権国家であったことが独立のための歴史的資源に（「証拠」としての琉米修好条約）
- ・さらに遡り、薩摩侵攻以前の琉球王国の国家経営（大交易時代の繁栄）が高く評価される

② 「琉球人」の歴史としての沖縄戦、という発想の困難

◆資料4 親川志奈子「ディスコネクトされた歴史と私を繋ぐ」（『N 27』2号、2013）

例えば比嘉豊光の「シマクトゥバで語る戦世」では、証言の中から他者である日本をはっきりと感じる事が出来る。「壕追い出し」や「強制集団死」の具体的な描写だけでなく、[日本語とは] 異なる言語から繰り出される音声や息づかい、生き生きとしたジェスチャーや表情の全てがワッターは日本人ではないのだという本質を物語っている。それなのに画面に出てくる人々の孫世代に当たる私たちは彼らの戦争体験を日本語の字幕に頼らなければ理解できない程に同化されているのだ。同化政策とは大昔のポリシーではなく日々深化し洗練され今日も生きているのだ。もはや私たちは「なぜ私たちは日本人ではないと言い切れるのか」を、顔も知らぬ外国のお偉い学者の理論を持ってきてなお説明しきれないでいる。[中略] 日本語人になった私たちが沖縄戦を学び、もっと知りたいとインターネットで検索すれば、戦争体験者の想いとは真逆の方向に進んでしまうと言うことが起こるのは、日本語で沖縄戦を見るということは日本人の視点で沖縄戦を見ていることに他ならないという事実から私たちが目をそらした結果なのではないか。血のつながった祖父母の体験談ではなく日本人が書いた沖縄戦に「正しさ」さえ感じてしまうというトラップは、強制集団死を巡る教科書検定問題や八重山教科書採択問題でも浮き彫りになっている。言葉にできない違和感を覚えている間にも、100倍近い日本人により「正しい」「沖縄戦」のあり方が決定され沖縄の子どもたちに教えられていくのだ。

*この激しい希求に表れる性急さから何を讀みとるべきか

→祖父母がたどった歴史との“つながり”の希求が、「日本語」排除の衝動をもたらす

→「日本語人」の自己に対する激しい嫌悪感、だが否定した自己を埋め合わすに足る充足感のない状態

⇒独立論の急進的興隆を生んだのは、日本社会の排外／純血主義とそれによる沖縄へのたび重なる侮辱
しかし、もっと奥に、グローバル化と振興策がもたらした沖縄の「発展」による喪失感の喪失がある

5. 沖縄戦研究から見えてくる視座 — 「集団自決」教科書検定問題以後の展開

① 〈「集団自決」＝沖縄戦〉という発想の相対化 ⇨林 2009 他

*天皇制国家の軍隊がアジアの戦場で起こした加害の一環としての「集団自決」

→沖縄の固有性に閉じ込めるのではなく、アジアにおける日本軍の加害の凝集点であることを提示

*「同化」の果てに起こった事件という物語り方への批判

→犠牲者の多くである女・子ども・老人は「皇民化教育」は内面化せず（住民の主体性を可視化）

② 構造と主体と責任 ⇨林 2009・宮城 2008

*社会構造のなかで起こった「集団自決」

→重合する社会構造：a. 軍民関係、b. 地域社会の権威主義的支配構造、c. 家父長制的家族秩序

→〈日本軍－日本人＝加害者〉対〈沖縄住民－沖縄人＝被害者〉では割り切れない実態

*個々の犠牲者家族を貫く家父長制的秩序の問題（「住民同士で殺し合った」のではない事実）

→「国家（天皇）→軍隊（戦隊長）→兵事主任→伝令→家長へと流れる命令系統が、戦闘の邪魔にな

る最も弱い者へと押し寄せた権力による犯罪」としての「集団自決」(☞宮城 2008)

*責任の問題は、社会構造における各行為者の位置関係によって、より厳密に議論できる
(構造の最上位に位置した日本軍の存在を抜きにして住民内部の責任にしない)

③「当事者性」に向かって“開かれた”記憶の継承 ☞屋嘉比 2009

*出自による共同性ではなく、歴史に根ざした学び合いが創出する社会性にもとづく動的定義へ

→「沖縄人になる」模索がアジアを含めた多様な接続へ開かれる契機に ~沖縄人自身の責任の自覚

*属性にもとづく議論を拒否した姿勢から何を考えるか

→属性を基準とする思考や文化の自己所有論こそ、近代以来の沖縄人を苦しめてきた問題

◆資料5 屋嘉比収 『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす：記憶をいかに継承するか』(世織書房、2009)

[戦後世代が沖縄戦の〈当事者性〉を獲得するために大切なのは] 沖縄人になるという視点である。[中略] 仮に沖縄戦の体験者を沖縄人と規定すると、戦後世代の非体験者である私たちは沖縄人ではないということになる。沖縄人でない私たちが、沖縄戦の体験を分有しながら〈当事者性〉を獲得していくことによって、どのような沖縄人になるのか。そこには、出自に関係なく沖縄戦の認識は広く開かれており、それをいかにとらえるかは非体験者である私たち自身に問われていることを意味する。[中略] その問いかけは、沖縄出身者であるから沖縄戦を知っており、自分が常にその中心に位置しているとの感覚を絶えず疑う、という考え方へと自ずとつながっていくことであろう。そしてそのことは、戦後世代が沖縄戦の教訓を分有することによって、沖縄戦そのものを相対化し、アジアに対する加害の問題を考えるうえで、一つの重要な糸口となると思われる。

Ⅲ 1995 年以後の沖縄現代史研究の展開と転回 — 占領初期／冷戦始期の歴史像を事例に

1. 「1995年以後」の沖縄戦後史研究

① 「95年世代」の眼前にあった条件

a. 1995年以降の沖縄民衆運動の盛り上がりと持続

b. 沖縄県公文書館開館を契機とした沖縄現代史史料の“解禁”

→ aを受けとめて、その根源である時期＝占領初期／冷戦始期の再検討を bによって刷新していく

② 条件に応えた3人の歴史家

i. 若林千代：1966年広島県生、現在・沖縄大学教授

『ジープと砂塵：米軍占領下沖縄の政治社会と東アジア冷戦 1945-1950』(有志舎、2015年)

ii. 森 宣雄：1968年横浜市生、現在・同志社大学学外研究員

『沖縄戦後民衆史：ガマから辺野古まで』(岩波書店〈岩波現代全書〉、2016年)

iii. 鳥山 淳：1971年神奈川県生、現在・沖縄国際大学教授

『沖縄／基地社会の起源と相克 1945-1956』(勁草書房、2013年)

③ 共通する知的系譜の“発見”

*国場幸太郎(1950年代、人民党の活動家として活躍するも出郷、復帰運動の国民主義的側面を批判)

→新崎盛暉へと継承されてきた運動論と戦後沖縄史への視座

④ 対峙してきた研究状況

a. 国民国家論的歴史研究：帰属やアイデンティティの問題に関心が集中

→反復帰論などの再発見も、この観点で行われる傾向(私自身もこの流れにあった者として…)

b. 既存の「政治」を前提とした政治外交史研究

→史料発掘等で旺盛に展開されるも、既存の認識枠組のまま展開される限り、「保革を乗り越える」新たな政治史的枠組みが提起されても、民衆史的視点とは乖離

2. その特徴的な叙述

①「政治社会」の歴史を書く

*「政治社会」:「国家からも市民社会からも外側に押し出されている」民衆が、「さまざまな方法で支配構造のなかに隙間を見つけては政治の領域を拡げ、さまざまな形の媒介の作用、対立や交渉、せめぎ合いのなかで「民主」という主題を追求していった」(若林前掲 p.11)、そうした空間

→狭義の「政治」以前に存在する民衆のさまざまな生存の欲求と行動から、政治を再定義する試み

②「社会変容」の中の政治

*米軍が引き起こした巨大な変化、絶え間ない日常性の破壊のなかで、政治はいかなる形態で可能か

③ 帰属ではなく民主・自治の希求に照準

*「この時期、人びとは「独立」か「復帰」かという主題以上に、「民主」あるいは「自治」という主題をより現実的かつ根源的な課題としてとり扱っている」(若林前掲 p.13) 点に注意して分析

*そもそも今日の「沖縄人」という意識は沖縄戦の集団的経験によって初めて可能になったのでは？(森の問題提起)

3. 「戦後沖縄の思想」の別の見出し方

① 運動の中で見出された直接行動の長い歴史

☞阿部 2011、上原 2013、森 2013・2014

*紡ぎ出される「復帰後」沖縄社会運動史の成果(金武湾闘争、やんばるの米軍反対闘争等)

～占領下の多様な社会運動史との連関、さらに現在の「座り込み」へとつながる実践の系譜

*「琉球共和社会憲法」(川満信一、1981年発表)の再発見 ☞川満・仲里 2014、新城 2014(9章)

② 沖縄人の近代経験の世界性・越境性から構想する未来

*沖縄人の思想を文化的固有性ではなく、沖縄戦を含めた近代経験の普遍性につなげて理解する方向性

→固有性と対立するのではなく、経験の固有性が即普遍的体験となる近代以降の時代性を反映

→「沖縄戦の記憶」は「民族の記憶」ではなく、共に生き延びようとする者が分有するものに

◆資料6 阿波根昌鴻の経験から見えてくる世界史(☞新城・丸川 2014)

僕がこの本[☞新城 2014b]で試みたことを大げさに言うと、琉球・沖縄イデオロギー批判を通して、沖縄の思想的可能性を国家横断的に模索するということになるかもしれません。沖縄の可能性は、沖縄の人々が、世界史的な人の移動を生きる過程で培われてきたものだと思います。[中略]沖縄の非暴力反戦基地運動の象徴でもある阿波根昌鴻さんは、一九三〇年前後のキューバとペルーで貧しい移民として生きた人です。あの時代の土地闘争の中の南米を生きたことが大事なのではないかと思うのです。沖縄に還って沖縄戦で一人息子を亡くされ土地を米軍に奪われるという過酷な状況の中で、阿波根さんたちが伊江島土地返還運動を始めていくとき、世界史的な反帝国主義運動が回帰していたはずです。故郷を追われた人間が居場所を求める。しかもその居場所を、ルーツや民族性で主張するのはない。「私たちには生きる権利がある」ということを、暮らすという営みの中で身体化し言葉とし、米軍に対して法の名において命ずるのです、「民主主義を守れ」と。こうした抵抗の繋がりの中に、僕

もまた身をおいていたいという願いはあります。

◆資料7 物神化されたアイデンティティに拠らない共同性へ (⇒新城・丸川 2014)

自決あるいは自己決定権において他者が消されるとき、民族共同体は暴力的な「絆」になると思います。岡本恵徳 [元琉球大学教授、反復帰論者の一人、新城 2014b 第2章参照] が重要なのは、復帰運動が「集団自決」的な反復となる危険を非常に早い段階で指摘していたことです。同時に岡本は、「集団自決」の中にそこから引き返す動きもありえたとし、復帰運動の中にも、「集団自決」的でない共生への希求が潜在していたと指摘しています。潜在性として「共に生きる」選択は常にある。そのときに大事なものは、血や言語の同一性ではなく、その場を生きる人たちによってそのつど創られる共同性です。 [中略] 殺さない、殺させない、共に生きることをどうやって選ぶか。そのことを考えていくとき、傷そして遍在性としての沖縄、そして沖縄戦の記憶を想起することは絶対不可欠だと思います。

IV 課題と展望

1. 沖縄社会の変貌と共に在る日本社会を思考するために

- ① ナショナリズムの相互模倣、それによって何が犠牲になるのか？
- ② 民衆史的視点の重要性 ～「民族運動」を乗り越える「民衆運動」構築の必要性 (cf. 板垣雄三)
 - * 無前提に共同性を想定することなく、主体を造形することはいかにして可能か
→ 主権論を含めた制度論的思考枠組みそれ自体の歴史化が必要
 - * 私たち (研究者／叙述者) 自身が同時代史において変貌した自覚を繰り返した歴史研究／叙述が必要

2. 越境性と複数性 — 研究史上の課題

- ① 越境性
 - * 沖縄人の越境経験によって生じる近代経験の世界性をふまえた近現代史叙述
(ex. 阿波根像の更新) ⇒ 鹿野政直 2015
- ② 複数性
 - * 〈沖縄現代史≒沖縄島現代史〉の現状をいかに克服するか？
→ 奄美の存在、「在日沖縄人」の存在 ⇒ 戸邊 2010・2012 他

3. 沖縄からの“よびかけ”に応えるには？

- * では、私たちはどのように「沖縄人に〈なる〉」のか
→ 私たちはどのような意味で奴隷なのか、自身の歴史をまさぐることなしにはありえないだろう

◆資料8 屋嘉比収「問われる民意：普天間移設新沿岸案を考える1」(『琉球新報』2006.4.18)

[日本政府が出した普天間基地の辺野古沿岸への移設案に合意した：引用者] 今回の名護市長や北部市町村会の姿勢に、現在の沖縄にまで色濃く残っている被植民者の卑屈な姿を見だし、さらにそれを自分の問題として自分自身をも刺し抜きながら批判しないといけない。そうしないと、琉球処分から現在の沖縄にまで続く被植民者の卑屈な姿勢を私たち自身の手で切断できないのだ。奴隷とは、自分が奴隷であることさえも自覚していない状態をさすという。その意味で、私たちは、いまなお「奴隷」な

のだ。／[中略]「県民世論の 70 %が新沿岸案反対」[中略]だという意志を、子供たちに伝えるためにも、辺野古の基地建設に合意しないと声をあげ続けることが重要だ。私は奴隷になりたくない。そのように声をあげることが、奴隷から脱する私たちに残された唯一の道だ。

⇒「私たち」とは誰か？ 「私たち」は可能か？

《引用・参照文献》

- 阿部小涼 2011 「繰り返し変わる：沖縄における直接行動の現在進行形」、『政策科学・国際関係論集』13号、琉球大学法文学部
- 上原こずえ 2013 「民衆の「生存」思想から権利を問う：施政権返還後の金武湾・反CTS裁判をめぐる」、『沖縄文化研究』39集、法政大学沖縄文化研究所
- 鹿野政直 2015 「阿波根昌鴻：「命どう宝」への闘い」、テッサ・モーリス＝スズキ編『ひとびとの精神史2 朝鮮の戦争 1950年代』岩波書店
- 川満信一・仲里効編 2014 『琉球共和社会憲法の潜勢力：群島・アジア・越境の思想』未来社
- 新城郁夫 2014 『沖縄の傷という回路』岩波書店
- 新城郁夫・丸川哲史 2014 「〈対談〉「世界史の中の沖縄」を考える：「死の共同体」からいかに引き返すか、どう逃げるか」、『図書新聞』3180号、2014.11.1
- 戸邊秀明 2010 「「残留者」が直面した境界の意味：日本占領期在九州沖縄人の声を紡ぐ」、黒川みどり編『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社
- 戸邊秀明 2012 「越境者たちの復帰運動：1950年代前半における在日本沖縄人学生の組織と意識」、『沖縄文化研究』38、法政大学沖縄文化研究所
- 戸邊秀明 2013 「現代沖縄民衆の歴史意識と主体性」、『歴史評論』758号、2013.6
- 戸邊秀明 2015a 「沖縄の自己認識の変貌と日本社会」、『同時代史学会 News Letter』26号、同時代史学会、2015.5
- 戸邊秀明 2015b 「沖縄戦の記憶が今日によびかけるもの」（成田龍一ほか編『記憶と認識の中のアジア・太平洋戦争：岩波講座アジア・太平洋戦争 戦後篇』、岩波書店
- 林博史 2009 『沖縄戦 強制された「集団自決」』吉川弘文館
- 松浦篤 2014 「沖縄独立論の陰に中国あり」、『中央公論』129巻2号、2014.2 *松浦は読売新聞記者
- 宮城晴美 2008 「座間味島の「集団自決」：ジェンダーの視点から（試論）」、屋嘉比収編『沖縄・問いを立てる4 友軍とガマ：沖縄戦の記憶』社会評論社
- 森啓輔 2013 「沖縄社会運動を「聴く」ことによる多元的ナショナリズム批判へ向けて：沖縄県東村高江の米軍ヘリパッド建設に反対する座り込みを事例に」、『沖縄文化研究』39集、法政大学沖縄文化研究所
- 森啓輔 2014 「直接行動空間の解釈学：沖縄県東村高江の米軍基地建設に反対する座り込みを事例に」、『社会システム研究』29号、立命館大学
- 屋嘉比収 2009 『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす：記憶をいかに継承するか』世織書房